

厚岸湾におけるゼニガタアザラシの漁場来遊行動に関する研究

北海道大学大学院 環境科学院
生物圏科学専攻 水圏環境生物学コース
今井貴裕

【背景・目的】 日本の沿岸および近海には、7種の鰭脚類が分布する。その中でも周年定着し、繁殖もしているものは、ゼニガタアザラシ(*Phoca vitulina*) 1種のみである。本種は沿岸浅海域で摂餌活動を行うことから、摂餌海域が人間の漁業海域と重なることが多く、漁業被害が問題になっている。北海道東部に位置する厚岸湾には、本種の国内で2番目に大きな上陸場である大黒島が存在し、しらうお小定置網漁、ニシン刺網漁で被害が深刻とされる。これまで返し柵や落とし罟等の漁業被害対策がなされているが、効果は思わしくない。今後本種と漁業が共存するためには、本種の利用海域の把握、漁業被害調査とその防止に役立つ情報が不可欠である。そこで本研究では、目視調査法、超音波テレメトリー手法を用いて本種の漁場来遊の有無や常習性について明らかにすることを目的とした。

【材料・方法】 目視調査は、2009年11月-2010年10月に北海道東部厚岸湾において、厚岸臨海実験所所有船舶「みさご丸」を用いて月に1回行った。本調査では午前9時-12時までの約3時間、2人の観察者が船舶の進行方向に対して右舷・左舷をそれぞれ90°観察した。調査航路は事前にジグザグ状に設定し、厚岸大橋付近から本種の主要な上陸場である大黒島沖合まで同じコース上を目視観察した。本種の出現時には、データシートに時刻や航路等を記載し、緯度・経度を記録した。また、同湾において超音波テレメトリー手法を用いた調査を行った。苫多、門静地区で2010年3月23日-5月12日、真竜地区で3月29日-6月4日に捕獲罟(箱罟)を設置した。捕獲した個体の背部に発信器(V13, VEMCO社製)を装着し、受信器(VR1; VR2; VR2W; VEMCO社製)を苫多・門静・真竜の漁場にそれぞれ2, 1, 1器設置し、本種の漁場への来遊をモニタリングした。また、漁場来遊要因として潮位、天候、漁獲量の影響と漁場付近における本種の行動を検証した。

【結果・考察】 目視調査の結果、計14日間の調査のうち、8日間で合計14頭のアザラシ類が確認された。本種の発見は、湾沿岸域および大黒島付近で多かった。また、しらうお小定置網漁が実施されていた2010年4月にアザラシ類の発見が最も多かった(n=6)。湾内の沿岸域で本種が多く発見されたこと、沿岸漁業が実施されていた時期に本種発見頭数が最も多いことから、本種は網に漁獲された魚を摂餌するために湾内に来遊していた可能性が考えられた。また、箱罟により本種2個体が捕獲された。テレメトリー調査の結果、2個体で計11日間の漁場来遊が認められ、常習的に漁場へ来遊することが明らかとなった。来遊時間帯は午前中が多かったものの、日周性は見られなかった。また、苫多地区で約1kmの距離間隔で設置した2器の受信器において、受信回数が異なることから、本種は特定の漁場へ来遊していることが明らかとなった。本種の上陸行動には潮位が関係していることが報告されていることから、来遊時間帯と潮位とを比較したが、有意な相関は得られなかった。また、本種が漁場に来遊していた日の天候および漁獲量を非来遊日と比較したが、有意差は見られなかった。さらに、漁場滞在時間と魚種毎の漁獲量にも有意な相関は見られなかった。このことから、本種は、特定の漁網付近で摂餌し、その漁場来遊と滞在は日和見的に生じる可能性が示唆された。今後は、標識個体数と受信器設置台数を増加し、経年的に、より詳細なデータを取得していく必要がある。